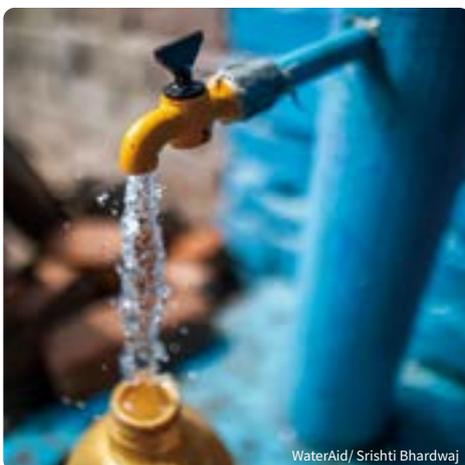




WaterAid/ Dennis Lupenga



WaterAid/ Basile Ouedraogo



WaterAid/ Srishti Bhardwaj



WaterAid/ Sokmeng You



WaterAid/ Basile Ouedraogo

Annual Report

2019.04-2020.03

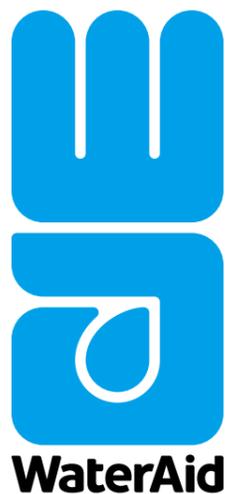
WaterAid JAPAN

A world where everyone,
everywhere has clean water,
sanitation and hygiene.

特定非営利活動法人ウォーターエイドジャパン 年次報告書 2019.04-2020.03



WaterAid



特定非営利活動法人
ウォーターエイドジャパン
年次報告書 2019.04-2020.03

- 1 目次 / ウォーターエイドのビジョン・ミッション
- 2 ウォーターエイドの歴史
- 3 水・衛生を世界の当たり前
- 5 手洗いで新型コロナウイルス感染症に立ち向かう
- 6 水・衛生はSDGs達成のカギ
- 7 ウォーターエイドの活動国と2019年度実績
- 9 プロジェクトから① 水・衛生で生活は大きく変わる～モザンビーク
- 11 プロジェクトから② すべての人に水・衛生を届けるしくみづくり～ウガンダ
- 13 プロジェクトから③ 水不足の中で水を確保する～インド
- 15 プロジェクトから④ 誰一人取り残さないために～ネパール
- 17 日本の活動
- 19 アドボカシー
- 20 企業・団体との連携
- 21 2019年度会計報告
- 22 ウォーターエイドジャパンについて

清潔な水、適切なトイレ、正しい衛生習慣をすべての人に

ウォーターエイドのビジョン

すべての人が、すべての場所で、清潔な水と衛生を当たり前利用できる世界。国際 NGO のウォーターエイドは、確固たる決意をもって、このビジョンを私たちの世代で実現することを目指します。

ウォーターエイドのミッション

清潔な水、衛生的なトイレ、正しい衛生習慣。健康で尊厳ある暮らしに欠かせないこの3つを届けることで、ウォーターエイドは世界で最も貧しく、社会的に取り残されている人々の暮らしを改善していきます。



WaterAid/ James Kiyimba



WaterAid/ Oman Seth Ahouansou



WaterAid/ Remissa Mak



WaterAid/ Remissa Mak



WaterAid/ Behailu Shiferaw



それは1981年に始まりました

1981年2月、「渴いた第三世界」という会議がイギリスのロンドンで開かれました。会議をきっかけに、清潔な水や適切なトイレを使うことができない多くの人々のために活動すべきだとの動きが起き、イギリスの水道事業で働く人々の募金活動を経て、1981年7月にウォーターエイドが設立されました。

その当時、水・衛生を専門とする NGO は、ほとんどありませんでした。

ウォーターエイドの活動は世界に広がり、各国で組織も立ち上がりました。2013年には、ウォーターエイドジャパンが設立されました。水・衛生専門の国際 NGO、ウォーターエイドは現在、世界34カ国で活動しています。

ウォーターエイドの歴史

- 1981年 イギリスの水道事業で働く人々の支持を受けて設立
- 1991年 イギリスのウェールズ公がウォーターエイド・イギリスの会長に就任
- 1995年 スtockホルムウォータープライズ受賞
- 2003年 イギリスにおいてチャリティオブザイヤー受賞
- 2004年 アメリカ、オーストラリアにウォーターエイド設立
- 2009年 スウェーデンにウォーターエイド設立
- 2013年 カナダにウォーターエイド設立
ウォーターエイドジャパン設立

水・衛生を世界の当たり前



不衛生な水を飲み続ける生活

アフリカ西部、シエラレオネに住むナンシーちゃんは、6歳のとき、1歳下の妹をなくしました。原因は、不衛生な水を飲んだことによる病気でした。

しかし、ナンシーちゃんとその家族は、妹の命を奪った不衛生な水を危険だと分かっても飲み続けるしかありませんでした。ナンシーちゃんの住むトンポフワン村では、清潔な水を手に入れる方法がなかったからです。

状況を変えるため、ウォーターエイドはトンポフワン村で住民主体の水・衛生プロジェクトを実施しました。成果が長く持続するように、取り組みは、住民たち自身が水や衛生に関する習慣や意識を見直すことから始まりました。家やトイレ、水源、野外排せつが行われている場所を調べて地図に書き込み、水・衛生と生活への影響について理解を深めました。



不衛生な水を入れたポリタンクを頭に載せて運ぶナンシーちゃん(当時6歳) = 2017年



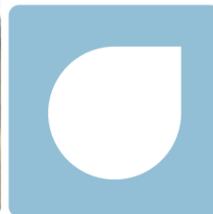
住民たちによる井戸の基礎をつくる作業



友達と一緒に学校で勉強するナンシーちゃん(右から3人目) = 2019年



学校に通うようになったナンシーちゃん = 2019年



そのうえで村の井戸を作る場所を話し合っていました。村の井戸は住民たち自身で建設し、村の中で清潔な水を手に入れられるようになりました。それぞれの家のトイレは各自でつくりました。

かつては、1日4回、長い時間をかけて行っていた水くみから解放され、ナンシーちゃんは学校に通うようになりました。父親のセルさんは「井戸ができたことで、不衛生な水のために病気になる恐怖から解放された。彼女はきっと立派な大人に成長してくれるだろう」と将来への希望を口にします。

世界の水・衛生の現状



世界では約2分ごとに1人の子供が不衛生な水や、適切なトイレの不足による下痢のために命を落としています

(※4) (※5) WHO/UNICEF Joint Monitoring Programme (JMP) 2019 「Progress on household drinking water, sanitation and hygiene 2000-2017: Special focus on inequalities」

ウォーターエイドのアプローチ～すべての人がアクセスできるしくみを



ウォーターエイドは、各国・各地域の社会・経済状況や、その地域ですべての人が安全な水やトイレを使うことができない原因を分析し、その原因を取り除くためのプロジェクトを計画、実行しています。

すべての人に水・衛生を届けるために必要な要素は、さまざまあります。ウォーターエイドの各国での経験も生かし、どのような要素が欠かせないかを一覧表の形にまとめたのが、左の図です。

水・衛生にアクセスできない人々が多くいる国や地域では、複数あるいは多くの要素が欠けています。

ウォーターエイドは各国・各地域で、すべての人が水・衛生を利用できる「しくみ」を整えるため、政府や自治体、NGO、住民などとパートナーシップを組み、欠けている要素の構築や強化に取り組んでいます。地域の中でこの「しくみ」が完成されれば、すべての人が水・衛生を利用できるようになり、その状況が長く維持されることが期待できます。

ウォーターエイドが構築・強化に取り組む要素と改善へのアプローチには、以下のようなものがあります。

<p>組織体制・制度</p>	<p>水・衛生設備を設置する計画づくりから設置後の維持管理まで、それらを担う省庁や機関、村の水衛生委員会などが機能していることが重要です。例えば、村の水衛生委員会が機能していない場合は、トレーニングを実施し、委員会が中心となって地域の水・衛生の課題を解決していくことを目指します。</p>	<p>環境・水資源</p>	<p>十分な水資源がなければ、水を使い続けるうちに井戸などの水源が枯れてしまうこともあります。水を使い続けるため、住民が主体となって、雨量や地下水量を計測しながら水の利用計画を立てるようにしたり、雨水を生活用水として利用すると同時に、地下に雨水を戻すことが可能な設備を設置したりしています。</p>
<p>ジェンダー・排除されがちな層</p>	<p>性別や年齢、障害、民族やカーストなどのため、水・衛生にアクセスできない人々があります。こうした人々が利用できる給水設備・トイレの設置を進めるほか、そのような給水設備・トイレに関するハンドブックを作成。政府や自治体、NGO、関連団体と共有するほか、その多くを公開しています。</p>	<p>データ・モニタリング</p>	<p>給水設備の具体的な場所や状況に関するデータがない国では、どの地域から優先的に水・衛生の改善に取り組んでいくか、計画が立てられません。政府の水・衛生に関する情報システムの強化、オンラインデータツール「mWater」を使った情報収集と分析、それらを使った計画立案の支援に取り組んでいます。</p>

手洗いで新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) に立ち向かう



感染拡大防止のため、ウォーターエイドはウガンダ・カンパラ市当局に足踏み型の手洗い設備60基を提供し、手洗い促進キャンペーンを実施した

確立された治療法やワクチンがない中、新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) に立ち向かうための最も基本的で、有効な手段の一つが、石けんと清潔な水で手を洗うことです。ウォーターエイドは1981年の設立以来、約40年間、水・衛生環境の改善に取り組むとともに、現地政府や地元のNGO、住民と連携しながら、正しい衛生習慣の普及のための大規模な取り組みを続けてきました。新型コロナウイルスの世界的な感染を受け、緊急の取り組みを実施しました。

40%
家庭

世界の40%の家庭には、水と石けんを使うことのできる手洗い設備がありません(*1)。

43%
保健医療施設

世界の43%の保健医療施設には、医師や看護師が治療に当たる場所に、水と石けんを使うことのできる手洗い設備がありません(*2)。

43%
学校

世界の43%の学校には、水と石けんを使うことのできる手洗い設備がありません(*3)。

(*1) WHO/UNICEF Joint Monitoring Programme (JMP) 2019 「Progress on household drinking water, sanitation and hygiene 2000-2017: Special focus on inequalities」
(*2) JMP 2019 「WASH in Health Care Facilities: Global Baseline Report 2019」
(*3) JMP 2020 「Progress on drinking water, sanitation and hygiene in schools: special focus on COVID-19」

駅や市場、保健医療施設などに手洗い設備

人々がこまめに手を洗うことができるよう、駅やバスターミナル、市場、保健医療施設、検疫所などに手洗い設備を設置しました。手で触れずに操作できる足踏み型の手洗い設備も導入しました。

ラジオや動画も活用した感染防止の呼びかけ

ラジオや動画、街中の看板や路線バスの車体、大型スピーカーや車載スピーカーなどを使い、手洗いや咳エチケット、人と距離をとることの重要性を発信しました。複数の言語や手話での発信も行いました。

当初の活動は、首都や都市部周辺が主でしたが、移動制限の緩和とともに活動地域も拡大。貧困層や社会から取り残されがちな人々をより意識した活動へシフトしていきました。

※新型コロナウイルス感染症に関する緊急対応の活動の内容は、一部、2020年度初め(2020年4月以降)の取り組みを含みます。



WaterAid Cambodia



水・衛生はSDGs達成のカギ



ゴール6は「安全な水とトイレを世界中に」

2015年の国連サミットで「持続可能な開発目標 (SDGs)」が採択され、貧困や飢餓、保健、気候変動などに関する17のゴールと169のターゲットを2030年までに達成することに世界が合意しました。

そのゴール6が「安全な水とトイレを世界中に」。貧困をなくし、持続可能な開発を実現するには水と衛生が不可欠であるとの認識のもと、すべての人が水・衛生へアクセスできることが世界全体で実現すべき目標として認められました。

しかし、水・衛生は、すべてのゴールの基礎とも言える要素です。誰もが水・衛生を利用できるようになったコミュニティでは、人々が健康になり、公平で生産的な暮らしを送ることができます。水・衛生はゴール6だけで完結するのではなく、貧困や飢餓、保健、格差といったさまざまな問題を解決するためにも、極めて重要な意味を持っています。ゴール6を実現することで、他にも多くのゴールを実現に近づけることができます。

持続可能な開発の基礎となる水・衛生



1 貧困をなくそう

清潔な水が使えない環境では、水くみに時間がかかり、水を購入するための費用や不衛生な水が原因の病気の治療代などの負担も大きく、貧困から抜け出すことが困難です。清潔な水と衛生的な環境があれば、体調不良で働けないことも減り、人々は水くみに費やしていた時間を、野菜作りや現金収入を得られる仕事に充てるのが可能になります。



3 すべての人に健康と福祉を

後開発途上国の保健医療施設の45%では清潔な水を使うことができません。そうした施設での出産では、女性と新生児の命が危険にさらされます。保健医療施設で清潔な水を使えることは、安全・安心な治療や出産、病気の感染拡大の防止のためにも不可欠です。水・衛生が確保できることで、コレラやトラコマ(目の感染症)などのリスクも減少します。



5 ジェンダー平等を実現しよう

家の近くで水が手に入らない地域では、多くの場合、女性と女の子が水くみを担っています。そのために、教育や収入を得る機会を失っています。適切なトイレが使えず、野外で排せつするしかない女性には、その途中で嫌がらせや暴力を受けるリスクがあります。水・衛生は、女性たちに安心をもたらす、教育を受けて社会で力を発揮する道を開きます。



2 飢餓をゼロに

発育阻害の4分の1は、満2才までに5回以上、下痢を発症したことに起因し、2番目の要因は、清潔で安全な衛生設備(トイレ)を利用できないことであることが示されています。保護者が手を洗わないまま子供に食べ物を与えたり、不衛生な場所に食べ物やミルクを保管したりすることもあり、水や正しい衛生習慣は、栄養状態の改善にも欠かせません。



4 質の高い教育をみんなに

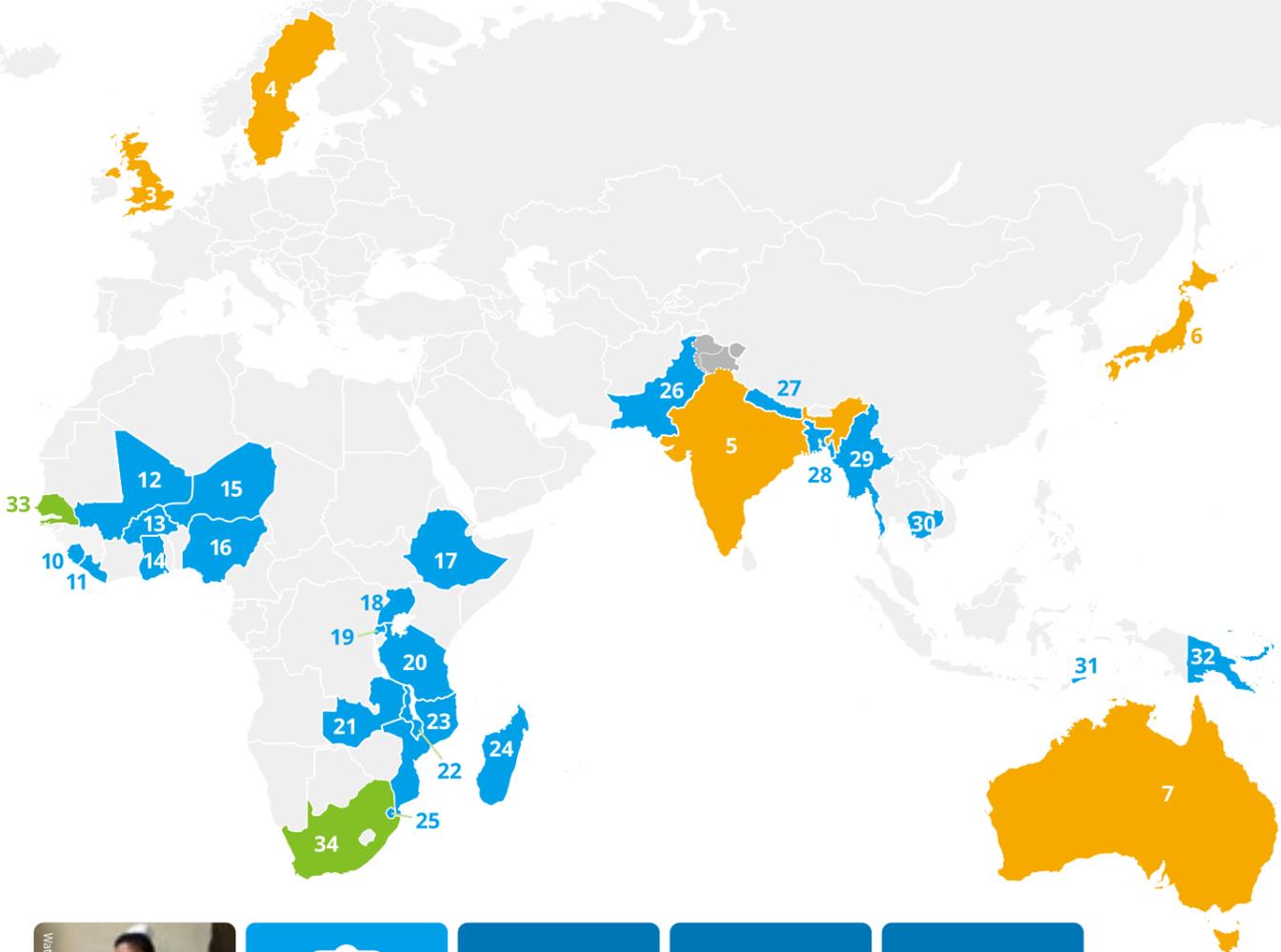
世界の31%の学校では、清潔な水を利用することができません。喉が渇いても水が飲めず、衛生状態を保つことも困難です。男女別のトイレがなければ、女子生徒は月経期間中、学校に通えません。授業についていけなくなって中退することもあります。学校に水とトイレがあれば、子供たちは安心して勉強を続けることができ、将来の可能性が広がります。



11 住み続けられるまちづくりを

2030年までには世界人口の3分の2が都市部に住むと予測され、特に開発途上国で都市人口が急速に拡大しています。就労の機会を求めて都市部に移り住む貧困層の多くは、給水設備やトイレが整備されておらず、コレラなどの病気が頻りに流行するスラムや都市周辺地域に住むしかありません。都市部の水・衛生の改善なくして、持続可能な都市には、なり得ません。

ウォーターエイドの活動国と 2019年度実績



●メンバー国

- 1 カナダ
- 2 アメリカ
- 3 イギリス
- 4 スウェーデン
- 5 インド
- 6 日本
- 7 オーストラリア

●プログラム実施国

- 8 ニカラグア
- 9 コロンビア
- 10 シエラレオネ
- 11 リベリア
- 12 マリ
- 13 ブルキナファソ
- 14 ガーナ
- 15 ニジェール
- 16 ナイジェリア
- 17 エチオピア
- 18 ウガンダ
- 19 ルワンダ
- 20 タンザニア
- 21 ザンビア
- 22 マラウイ
- 23 モザンビーク
- 24 マダガスカル
- 25 エスワティニ
- 26 パキスタン
- 27 ネパール
- 28 バングラデシュ
- 29 ミャンマー
- 30 カンボジア
- 31 東ティモール
- 32 パプアニューギニア

●地域事務所

- 33 セネガル
- 34 南アフリカ



家庭
40.2
万人

学校
18.2
万人

保健医療施設
101.2
万人

に清潔な水を届けました



家庭
191
万人

学校
45.6
万人

保健医療施設
130.9
万人

が正しい衛生習慣を身につけました



家庭
70
万人

学校
21.2
万人

保健医療施設
131.5
万人

に衛生的なトイレを届けました



(注)

数字は2019年4月1日から2020年3月31日までの間に、ウォーターエイドまたはそのパートナーが直接、支援を届けた人数。

家庭に関する人数は、自宅または自宅の近くで、それらを利用できる人数。学校に関する人数は、児童・生徒数および職員の数。保健医療施設に関する人数は、1年間の患者の総数と職員数。

衛生習慣を身につけた人数は、改善された設備を利用し、少なくとも年に3回以上、行動変容のための活動に参加した人の数。

ウォーターエイドの働きかけの結果による法改正や、行動の変化、関連知識の蓄積などによる効果は、より大きいものの、この数字には含めていない。





プロジェクトから①
水・衛生で
生活は大きく変わる
モザンビーク



WaterAid/ Chileshe Chanda

太陽光発電なども活用して清潔な水が使えるようになったコミュニティでは水場に笑顔が広がる

清潔な水、適切なトイレ、正しい衛生習慣は、生きていくうえで欠かせません。そして水・衛生は生活を変え、可能性を開きます。支援を行うときには、水・衛生が届かない根本的な原因を探り、住民とともに、地域にあった解決策を検討します。住民のプロジェクト参加を重視することで、「自分たちの設備」という意識も強まります。

● 清潔な水は、安全・安心にもつながる

モザンビークの首都マプトから北へ2,000キロ以上。ナンブラ州のメンバ、モスリル両県は、国内で最も貧しい地域の一つであり、水・衛生の改善も進んでいませんでした。女性や子供が川へ水くみに行っていました。背の高い草が茂っていて、道はほぼ完全に覆われています。危険なので、できるだけ何人かまとまって移動するようにしていました」と、娘のアティジャさんが水くみに行っていた、モスリル県ムココロネ村のアリマさん(43歳)は話していました。

「義理の妹は、水くみの途中でレイプされました。井戸ができるまでは、アティジャが川から無事に戻ってくるたびに、感謝の祈りを捧げようと思ったほどです。何が起きても不思議ではなかったのです」

ウォーターエイドは、電気の供給も不安定なこの地域で、太陽光発電を利用した11の水供給システムをつくり、コミュニティに水を届けました。規模が小さいコミュニティでは井戸を活用。新たに32の井戸を掘削し、30の井戸を修理しました。そして、49,000人以上が清潔な水が使えるようになりました。



WaterAid/ Eliza Powell

水くみをするモスリル県ナコト村のベアトリスちゃん(左)と友人=2017年

● 水くみの負担から解放され農作業を存分に

清潔な水は、生活にも大きな変化をもたらしました。「ご覧のとおり、私たちの家には鉄板の屋根があり、電気も使えます」とアリマさん。「家のすぐそばで清潔な水を手に入れられるようになったので、農場で存分に働くことができるようになったのです。耕作面積を広げることができ、収穫もずっと多くなりました」。

ウォーターエイドは、トイレや衛生習慣の普及にも力を入れました。学校や保健センター、教会、モスクなどを通じて、8万3,000人余りにメッセージを伝えたところ、2019年の1年間だけで住民たち自身によって、545の手洗い設備が作られました。すべての家にトイレがつくれ、野外で用を足す人はいなくなりました。学校には、障害者や月経中の女子生徒も安心して使うことのできるトイレ6基もできました。モスリル県の医師によると、2019年7月の下痢の症例は11例で、1年前の約5分の1になりました。



WaterAid/ Chileshe Chanda

ウォーターエイドの取り組みを高く評価するモスリル県の地区管理者、ネリーナ・ジョネ・ブスタニさん



WaterAid/ Chileshe Chanda

清潔な水が使えるようになり、水くみの負担がなくなって、生活が大きく改善したアリマさん(右)。鉄板の屋根と電気のある家が誇らしい



WaterAid/ Chileshe Chanda

娘のアティジャさん(右)と一緒に食事の用意をするアリマさん。農作業も存分にできるようになったという

● 修理のトレーニングや維持管理のための組織も

水に関する設備は、時間の経過とともに修理が必要になります。地下水に海水が混じって、飲用に適さない塩分濃度になっていないか、確認することも必要です。水を使い続けるためには、コミュニティ主体の維持管理が大切になります。そこで、住民向けに修理のトレーニングを実施し、コミュニティごとに水に関する住民組織も設立。将来の修繕費に充てるため、利用料金を徴収するようにもなりました。

● 成果をさらに広い地域へ

モスリル県の地区管理者のネリーナ・ジョネ・ブスタニさんは「取り組みは、コミュニティに目に見える利益を残し、人々の生活を向上させました。今、子供たちは水場で大喜びしています。その場面を見るのがとてもうれしいです」と話します。この成果をさらに他の地域にも広げるため、ウォーターエイドはモスリル県と協議を進めています。



WaterAid/ Chileshe Chanda

電力の供給も不安定な地域で水供給システムを支えるソーラーパネル





プロジェクトから② すべての人に 水・衛生を届ける しくみづくり ウガンダ



コミュニティの「トイレ宣言」に署名するカンパラ市のチャールズ・スッセルンジョギ中央区長。
スラム出身で水・衛生の改善に積極的に取り組む

すべての人が水・衛生を利用できるようになり、その状態が長く維持されるには、そのための「しくみ」が必要です。そのしくみは、さまざまな要素から形作られ(4ページ参照)、多くの人々によって支えられます。ウォーターエイドは、コミュニティのレベルから国のレベルまで、あらゆるレベルで支援や提言を行い、水・衛生を届けるしくみ全体の強化を図っています。

● しくみがあれば国・地域で設備建設も維持もできる

各国・各地域で水・衛生の状況を持続的に改善していくしくみが機能すれば、その国・地域の人々の力で、すべての人が清潔な水と適切なトイレを使い、正しい衛生習慣を実践することが実現し、その状態が維持されていくとウォーターエイドは考えています。一方、しくみがなければ、手押しポンプは壊れ、トイレは排せつ物であふれ、手洗い習慣は忘れられてしまいます。

そのしくみには、水が使えなくなったら市民が声をあげることや、具体的にどの地域で給水設備が不足し、どこかの給水設備が壊れているのが把握されていること、政府がデータに基づいて地域の水・衛生改善計画を立てること、必要な予算が確保されること、維持管理のための体制や水道料金の制度が整っていることなどが含まれます。



ウガンダ上下水道公社のスタッフ。水・衛生が人々に届くためには多くの人の活動が必要

● 4カ国でSusWASH(持続可能な水・衛生)プログラムを実施

しくみづくりを目指して、ウォーターエイドは、ウガンダ、カンボジア、エチオピア、パキスタンの4カ国で、SusWASH(持続可能な水・衛生)プログラムを実施しています。

最初に、政府や自治体、市民、民間セクターが参加するワークショップを開催。地域の水・衛生の課題を洗い出した結果とウォーターエイドによる調査結果を確認し、各国・地域の実情に合わせて内容を設計しました。

● カンパラ首都庁と連携し改善の取り組み

ウガンダでは、首都カンパラを活動地域に選定。給水設備の維持管理とトイレの普及、衛生環境の改善に焦点を当てています。

■ 水・衛生サービスの維持管理強化

カンパラの課題の1つは、水・衛生サービスを維持するための予算でした。そこで、カンパラ首都庁の職員を対象に、運用中の費用も合わせた全費用(ライフサイクルコスト)に関する研修を実施し、維持管理の予算確保を働きかけました。その結果、衛生設備の新たな基準に、ライフサイクルコストの計算が盛り込まれました。基準は、衛生に関わるカンパラの全機関が使用することから、効果の広がりが期待されます。

■ コミュニティレベルの衛生環境の改善

市内中心部のスラム「カムウォキヤ」では、0.5平方キロに満たない広さに約6,000人が生活しています。ごみは収集されず、排水路や道路に捨てられたりしています。トイレは、あったとしてもくみ取りができないものが少なくありません。ウォーターエイドは、衛生改善に取り組むコミュニティグループ「ウェユンジェ」(自分たちできれいにするという意味)を支援。グループは家々を訪ね、トイレの必要性や正しい使い方、トイレの後や食事の前に手を洗うこと、ゴミの捨て方などを伝えています。リーダーのクリストファー・タムワインさんは、「状況を変えるにはコミュニティと教育の力が必要」と、活動に打ち込んでいます。

■ 首都庁などとトイレ整備のキャンペーン

ウォーターエイドはまた、カンパラ首都庁や市長などによる衛生キャンペーン「No toilet, no tenant」(トイレがないなら、借りる人はいない)の立ち上げを支援。スラムなどインフォーマルな居住地で、トイレへのアクセスがない物件を貸し出している家主を規制することで、トイレの整備を促しています。

● 新たなアプローチを多くの現場に

クリストファーさんは「私たちの活動は重要ですが、大きなしくみの中の一部分です。政府や自治体にも責任を持ってもらう必要があります」と指摘します。しくみをつくるウォーターエイドのアプローチは、国連経済社会局のレポート(※6)でも「NGOによるこれまでの支援(できるだけ多くの人々に直接的に水・衛生を届けることを目的としたもの)と比較して、政府主導によるサービス提供を促すことで、コストを低く抑えつつ、規模や実施地域などの拡大が可能になるアプローチ」として注目されています。ウォーターエイドはSusWASHなどで得られた知識や経験の発信、より大規模なプログラムでの活用を行っていく予定です。

※SusWASHプログラムは、H&M財団の協力も得て実施しています。
(※6) Accelerating progress towards SDG 6: a system strengthening approach for water, sanitation and hygiene that leaves no one behind
<https://sustainabledevelopment.un.org/partnership/?p=30208>



スラムで水・衛生の習慣を広めるコミュニティグループのリーダー、クリストファー・タムワインさん



雨が降るとカムウォキヤのスラムは水浸しになる。コミュニティでは衛生改善の取り組みが続く





プロジェクトから③
**水不足の中で水を確保する
 インド**



WaterAid/ Prashanth Vishwanathan

手押し井戸で水をくむヨギータさん。日に6回の水くみに追われ、食事もとれないこともある=2018年

必要な水が使えず、水の需給がひっ迫している状態を「水ストレス」(※7)といいます。気候変動の影響が深刻になり、水の利用量も増加するなか、多くの国が水ストレスの問題に直面しています。

● **水くみに追われ食事をとれない日も**

2030年までに、インドの水需要は、利用可能な水の供給量の2倍に達すると予想されています。インドはまた、世界で最も多く地下水を使用している国で、使用量は世界全体の24%に上ります。その地下水は、過剰なくみ上げと数十年間の不適切な管理、さらには気候変動の影響もあって、近年、大きく減少しています。インドでは、水が不足する地域で10億人が暮らしており、このうち6億人は水ストレスの大きい地域や極度の水ストレスにさらされている地域に住んでいます。

マディヤ・プラデシュ州セホール県のディワリヤ村に住むヨギータさん(25歳)は、水に悩む住民の1人です。多いときには1日6回、家から約500メートル離れた手押しポンプまで水をくみにいきます。水くみの間、生後11カ月の息子は近所の人に預けています。夏の数カ月間、村の井戸は干上がってしまうため、近くの村や農場に水をもらいに行くか、給水車から水を買うしかありません。政府が最近実施した調査によると、この地域の井戸の半数は水位が下がっており、過去10年で4メートル以上も低くなっています。

「水くみの列に並んだり、水をくみに行ったりすると、決まった時間に食事を出せなくなり、夫に怒られてしまうこともあります。水くみに追われ、私は1日、食事をとれないこともあります。水くみが私の一番大事な仕事なのです」とヨギータさんは話します。



● **村の水衛生委員会、住民が主体で計画を推進**

清潔な水を1年を通して得られるようにするため、ウォーターエイドは、現地政府と住民が主体となって、地域の給水と地下水保全のしくみをつくる取り組みを進めています。

インドでは、各村の水衛生委員会が、政府から予算を調達し、村の水・衛生の改善を図る役割を担っています。しかし、委員会の機能が不十分なために状況が改善されないケースが多くあります。そこでウォーターエイドは、取り組みの第一段階として、村の水衛生委員会に対するトレーニングを実施し、その責任について啓発。そのうえで、給水設備の維持管理や地下水を増やすこと(涵養)についての理解を促しています。

次の段階では、村の水衛生委員会と住民が協力し、給水設備の整備と地下水保全推進の計画を立案。ウォーターエイドは、設備の形状などに関する技術的な支援を行います。この計画に基づき、給水設備の修復や新しい設備の設置を行い、池や雨水を利用した地下水涵養のしくみをつくります。

● **雨水タンクを設置し、井戸に接続して地下水を増やす**

ウォーターエイドが最近、多くの地域で採用しているのが、雨水貯留タンク付き地下水涵養設備の設置です。雨水をタンクに貯め、その水を飲料水や家庭用水として使うとともに、古井戸に接続し、貯めた雨水の一部を地下に戻すことで地下水を増やすことを図ります。

ケララ州バラカド県では、雨水を手掘り井戸に流す取り組みも実施。設置した700世帯中、587世帯が回答した調査の結果、設置前の2018年には「夏の間井戸が枯れた」との回答が41%だったのに対し、設置後の2020年では「夏の間井戸が枯れた」は8%にとどまりました。硬度、濁り、塩分など、「水質が改善した」との回答は62%は上りました。

こうしたしくみや設備をつくる時、ウォーターエイドは、対象地域全体や村にとっての「モデル」を示すことを重視しています。例えば給水設備を修復する場合、ウォーターエイドのプロジェクトで修復するのは、村で数カ所のみ。それ以外は、村の水衛生委員会が計画を立てて改善していくように支援します。

● **実践の教訓をより広い地域へ**

インドでは今、2024年までに全家庭に水道管によって水を供給するという政府の宣言のもと、積極的な取り組みが進められています。2019年にウツタル・プラデシュ州バンダ県が実施し、ウォーターエイドが技術面でサポートした大規模な給水・貯水設備の整備では、2,400余りの井戸と、水くみの際にあふれた水を再度、地面に浸透させるための約2,600の堀がつくられ、新たに約4,000トンの水が使えるようになりました。

ウォーターエイドは、住民と村の衛生委員会が主体となって給水設備の修復や水の保全、地下水涵養に取り組む手法を、行政とのパートナーシップも生かしながら、積極的に広めていきます。

(※7) 人口1人当たりの最大利用可能水資源量(生活、農業、工業、エネルギーおよび環境に要する水資源量)が1,700立法メートルを下回ると「水ストレス下にある」状態とされ、1,000立法メートル未満は「水不足」、500立法メートル未満は「絶対的な水不足」の状態とされます。



ディワリヤ村の開口井戸。4月には水が枯れてしまうので住民たちは他の村に水をくみに行ったり給水車の水を買ったりするしかなくなる=2018年



手押し井戸から水をくむブーナムさん。長く歩き順番を待っても、水が干上がってしまっていることも多い。水が出ててもそれは不衛生で塩分混じり。水くみのため、学校もやめた。「私が毎日、水くみをしないとどうなるの?」と話す=ウツタル・プラデシュ州のブンデルカンド地域、2018年



屋根から集められた雨水を、フィルターで洗浄・ろ過した後、手掘り井戸に流す設備。設置後は、夏の間も井戸が枯れなくなり、水質も改善したとの声が寄せられている



プロジェクトから④
誰一人
取り残さないために
ネパール



車いすで生活するネパール・ドラカ郡のスミトラーさんと家族。水利用やトイレなど不自由なことが多いという

持続可能な開発目標(SDGs)が目指す「誰一人取り残さない」世界を実現するには、すべての人が水・衛生にアクセスできることが前提です。ウォーターエイドは社会から取り残されがちな人々やそうしたコミュニティに重点を置いた活動を通してSDGsの達成にも貢献しています。



● 水・衛生における格差

現在、ネパールでは10人に1人が清潔な水を利用できません。年齢や性別、障害、カーストなどを理由に水・衛生サービスから排除されている人々がいるうえ、都市から遠く離れた山間部の農村はアクセスが極めて悪いために、公共サービスも行き届いていません。

ウォーターエイドはこうした問題の解決を支援するため、2019年からドラカ郡の2つの地域で水の安全保障と気候変動に強い水・衛生を目指したプロジェクトを実施しています。プロジェクトは初年度で詳細な現地調査が完了し、計画や予算の具体化の段階に入りました。



自宅のトイレの前で、「車いす向けではないので、どうしても誰かの手を借りなくてははいけません」と話すスミトラーさん



小川から水をくむラッテさん。
ほかに水を手に入れる手立てがない



水の入ったガグリ(水瓶)を持って家に帰るナンダさん

● 生活に重くのしかかる水の問題

美しい山々が連なるドラカ郡のカリンチョクとシャイラングは、山崩れや干ばつ、地震などの自然災害が多い地域でもあり、近年は気候変動の影響でますます被害を受けやすくなっています。災害が発生すると水源が干上がったり泥水が流れ込んだりして、清潔な水を手に入れるのが極めて困難になります。けれども災害のないときでさえ、家から遠く離れた水源まで水をくみに行かなければならない人々がこの地域には大勢います。

ラッテ・シュレスタさん(55歳)は毎日3回、往復1時間かけて水くみに行っています。「もっと簡単に水が使えるなら、畑仕事により多くの時間をかけられるので、収入を増やして子供に必要なものを買ってやれるんですけどね」とラッテさんは言います。この地域では近所に給水設備があっても壊れている場合が多くあります。そして、苦労して遠くの水源から重い水をくんできても、その水が不衛生なために病気の原因になることが少なくありません。



「私の年齢になると、重い水を運ぶのは本当に大変です。水くみからの帰り道は上り坂なので、ほんの数歩でも足が震え、疲れ切ってしまいます」と話すビシュヌマヤさん

● 基本的人権としての水

車いすを利用しているスミトラー・タミさん(35歳)は、水源から引いたホースの水を使っています。しかし、このホースは途中で外れるなどの問題が毎日のように起きるため、そのたびに夫や子供がホースをつなぎに行ったり、他の水源に水をくみに行ったりしています。ホースから水が出る時には必ず容器に水を貯めるようにしていますが、家に1人でいるときに水がなくなると、どんなに喉が渴いてもどうすることもできません。「家でいつでも水が使えるれば、どれほど生活が楽になることか。生きるうえでこんな基本的なことすら誰かに頼らないといけないなんて、本当に悲しくなります」とスミトラーさんは言います。

● 水・衛生のユニバーサルアクセス実現のために

ウォーターエイドは現在、この地域に大規模な給水設備をつくる計画を進めています。地形を生かし、高低差による重力を活用して水を流すことで、維持管理を容易にし、長く使えるように考えました。この設備ができれば、約6,000人がいつでも近所で清潔な水を手に入れられるようになります。また、学校やコミュニティでも衛生習慣の改善や住民のエンパワーメント(能力強化)を支援するなど、すべての人の水・衛生へのアクセス確保を目指してさまざまな活動を計画・実施しています。SDGsが掲げる「誰一人取り残さない」世界の実現に向けて、ウォーターエイドは現地政府や多くのパートナーと共に、このプロジェクトにさらに精力的に取り組んでいきます。

日本の活動

ウォーターエイドは、水・衛生専門のNGOとして、開発途上国の水・衛生に関する情報発信などに力を入れています



スピーカークラブ

2014年から取り組みを始めた「ウォーターエイド・スピーカークラブ」は、より多くの日本の方に、途上国の水・衛生の状況やウォーターエイドの活動に関心を持っていただくことを目的として活動しています。ウォーターエイドが実施する1日の「スピーカー講習会」を受けて「スピーカー」になった皆さんが、ウォーターエイドのオリジナル教材・授業案を使用して、学校やイベントなどで授業を実施しています。

2019年度は、東京と大阪などでスピーカー講習会を計4回、実施し、新たに49人がスピーカークラブに加わりました。

ウォーターエイドジャパンは、東京都教育委員会の「オリンピック・パラリンピック教育推進支援事業（コーディネイト事業）」などにも協力しており、2019年度は東京都、神奈川県などの合計13校で出前授業を実施しました。また、水問題の研究活動を続ける静岡県立三島北高校の取り組みにも協力しました。

墨田区水の循環講座

ウォーターエイドジャパンが事務所を置く東京都墨田区は、雨水活用が活発に行われるなど、水への関心が高い地域です。ウォーターエイドジャパンは2016年度以来、毎年、同区から委託を受けて「墨田区水の循環講座」の企画・運営を担当しています。2019年度も「すみだと世界をつなぐ水の大切な話」として、各回ごとにテーマを設定し、施設見学やまち歩き、ワークショップを行いました。

講義内容

第1回 プロジェクトWET講習会 in すみだ / 第2回 食と水 / 第3回 オリンピックと水 / 第4回 都市と水 / 第5回 防災と水 / 第6回 地形と水 / 第7回 水の授業（新型コロナ感染症の拡大防止のため中止）

世界水の日 Blue for Water キャンペーン

3月22日の世界水の日に向けて、ウォーターエイドは、世界を青く染めるBlue for Waterキャンペーンを展開しました。日本国内では以下の6施設が当日、ウォーターエイドジャパンの呼びかけに応え、ライトアップに協力してくださいました。またSNSでも、青い写真やハッシュタグ#Blue4Waterを使った投稿を通し、多くの皆さまがキャンペーンに参加してくださいました。

ライトアップにご協力くださった施設

- さっぽろテレビ塔（札幌市）
- 東北電力ネットワーク株式会社岩手支社 マイクロ無線鉄塔（盛岡市）
- アサヒグループ本社ビル（東京都墨田区）
- 東京ビッグサイト（東京国際展示場）（東京都江東区）
- 神戸ハーバーランドumie モザイク大観覧車（神戸市）
- 別府タワー（大分県別府市）



大阪で開催したスピーカー講習会の参加者の皆さん



首都圏外郭放水路を見学した参加者の皆さん（第5回「防災と水」）



（写真左）青く染まるアサヒグループ本社ビル
（写真右）青く染まるマイクロ無線鉄塔
東北電力ネットワーク株式会社 岩手支社

AC ジャパン支援キャンペーン

ウォーターエイドジャパンは、公益社団法人AC ジャパンが実施する支援キャンペーンの支援団体のひとつに選ばれ、2018年7月から、新聞やテレビ、駅、電車などの無償の広告枠で、ウォーターエイドのCMや広告が放送・掲載されています。

2018年7月から2019年6月までは、ランドセルを背負って学校へ行く日本の子供と、ポリタンクを背負って遠い水たまりまで往復する子供を対比した「ランドセルとポリタンク」の広告が発信され、学校からも多くの問い合わせがありました。2019年7月からは、「妹の命を奪った水」のテーマで、不衛生で危険だとわかっていても、その水に頼るしかない厳しい現状に焦点を当てました。CMのナレーションは夏木マリさんが担当してくださいました。



メディア掲載

世界トイレの日（11月19日）や世界水の日（3月22日）には、ウォーターエイドが制作・発表する報告書の日本語版を公開・発信しました。世界トイレの日の報告書は、「知られざる衛生作業員の世界」。十分な防具もないまま、ときには素手でトイレのくみ取り作業などを担っている実態をまとめました。世界水の日には、世界の水の現状を「気候変動の最前線」の切り口で伝えました。

こうした報告書や活動、ウォーターエイド活動国の新年行事などについてプレスリリースも発信し、関連のメディア掲載は1年間で282件となりました。

主なメディア掲載

- 5月 こども水道新聞に、ウォーターエイドの取り組みやエチオピアの現状などを伝える記事
- 9月 環境会議「SDGsの舞台は途上国 個別の開発課題を直視せよ」
- 11月 朝日新聞デジタル他「汲み取り作業などに従事する開発途上国の衛生作業員の過酷な状況が明らかに」
- 12月 東洋経済オンライン他「ウガンダでは黒土とビールを顔に、エチオピアは牛ふんで掃除～各国でユニークな新年行事」
- 3月 読売新聞オンライン他「気候変動対策の少なすぎる予算が明らかに」
産経ニュース他「世界水の日で報告書：気候変動の脅威と、立ち向かう取り組みを紹介」
@DIME（アットタイム）「3月22日、世界水の日で東京ビッグサイトが青く染まる」



十分な防具や装備もないまま危険なくみ取り作業に従事するインドの衛生作業員

大阪マラソン

ウォーターエイドジャパンは、2019年12月に開催された第9回大阪マラソンでオフィシャル寄付先団体（フラッグシップパートナー）に選ばれ、30人のランナーがウォーターエイドのチャリティランナーとしてエントリーし、水・衛生の活動のために、寄付を集めてくださいました。また、多くの一般ランナーの皆さまが、ウォーターエイドのチャリティーテーマである水色「自然環境を支える」を選んでくださり、エントリー費の一部を寄付してくださいました。大阪マラソンでのオフィシャル寄付先団体への選定は5回目です。

すべての人に水・衛生を届けるために走ってくださったチャリティランナーさん



アドボカシー

ウォーターエイドジャパンは、各国のウォーターエイドやNGOなどとともにアドボカシー活動に取り組んでいます



WHO 総会で保健医療施設の水・衛生改善へ決議

2019年5月に開催された世界保健機関(WHO)総会で、ウォーターエイドが注力してきた保健医療施設における水・衛生のアクセス改善に関する決議が採択されました。ウォーターエイドジャパンは、日本政府に対し、同決議への賛同を呼びかけました。

TICAD7「横浜宣言」が水・衛生について言及

2019年8月28日～30日、横浜市で第7回アフリカ開発会議(TICAD7)が開催されました。ウォーターエイドジャパンは、TICAD7に向けたアドボカシーに取り組むNGOネットワーク「市民ネットワーク for TICAD」に参加して活動しました。ウォーターエイドはアフリカの活動国と連携して水・衛生の重要性を発信。TICAD7の成果文書「横浜宣言」に、水・衛生が盛り込まれました。

期間中、イギリス、エチオピア、マラウイなどのウォーターエイドの協力を得て、保健・栄養と水・衛生に関する公式サイドイベントを実施しました。マダガスカルの大統領やエチオピアの保健省大臣、世界銀行の副総裁、JICAの国際協力専門員などが登壇しました。



(左から) オリーブ・ムンバ 東アフリカ地域国家エイズ・保健サービス組織ネットワーク事業部長、相賀裕嗣 JICA国際協力専門員(当時。現在は長崎大学大学院熱帯医学グローバルヘルス研究科教授)、マナイエ・シヨウム ウォーターエイド・エチオピアテクニカルサービス部長、アニー・ムソサ ウォーターエイド・マラウイ プログラム長



マダガスカルの大統領ルシアン・ファンメザントゥア・ラナリヴェロ 農業・畜産・漁業大臣



エチオピアのリア・タデッセ・ゲブレメディン 保健省大臣

PMAC2020 / UHC フォーラム2020でもサイドイベント

保健政策などをテーマにタイで毎年開催されているマヒドン王子記念賞会議(PMAC)が、UHC(ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ)フォーラムと合わせて2020年1月31日～2月2日、タイで開催されました。ウォーターエイドは、保健医療施設における水・衛生改善に関するサイドイベントをWHO、カンボジア保健省と共催しました。JICAの国際協力専門員も登壇し、改善の事例などが報告されました。



企業・団体との連携

ウォーターエイドを支えてくださった皆さま



2019年度、ウォーターエイドは、多くの企業・団体の皆さまとも連携することにより、水とトイレ、衛生習慣へのアクセスを改善し、多くの人々の生活を変えることができました。皆さまの温かいご協力に心より感謝いたします。

- アトラスコプロ株式会社
- アビームコンサルティング株式会社
- 株式会社エルビー
- 株式会社クエリー
- 東京海上日動 Share Happiness 倶楽部
- 株式会社ナック クリクラビジネスカンパニー
- 栗田工業株式会社
- 株式会社小森コーポレーション
- 株式会社達心
- 株式会社電巧社
- 株式会社ハリカ
- 合同会社PVH ジャパン
- 大阪マラソン

アビームコンサルティング株式会社 ▶▶▶ご寄付に加え、ご助言やチャリティーマラソンも

ネパール、東ティモール、インドなどでの水・衛生プロジェクトに対し、2013年より毎年ご寄付をいただいています。また、同社の本業であるコンサルティングのスキルを生かし、情報発信や業務改善への専門的アドバイスや、RPA導入による一部事務作業の効率化も支援くださいました。さらに、同社の社員の方の大阪マラソンへのチャリティーランナーとしての出場や社員向けの講演会など協業関係を築いています。

大阪マラソンには社員の方がチャリティーランナーとして出場



株式会社 ペー・ジェー・シー・デー・ジャパン ▶▶▶節水仕様の石けんシャンプーの売り上げで水・衛生を支援

スキンケアやスカルプケア事業など展開する同社は、「せっけんは、地球を救う子どもたちに届ける水100トン チャレンジ」として、リンスやトリートメント不要の石けんシャンプー「サボン モーヴ」の売り上げごとに、インドのマディヤ・プラデシュ州ディンドリ県の人々に清潔な水と衛生環境を届ける活動にご寄付くださっています。

コミュニティの水源で洗たくをするインドのマディヤ・プラデシュ州ディンドリ県の住民



栗田工業株式会社 ▶▶▶モザンビークの中でも状況が深刻な地域の改善へ

水処理企業である同社は、社会貢献活動の一環としてNPO・NGOと連携し、安全かつ清潔な水を得ることが難しい国や地域の人々に対して、支援を行っています。2019年、モザンビークのなかでも水・衛生の課題が深刻なナンブラ州メンバ郡・モスリル郡におけるプロジェクトにご寄付いただき、安全な水の確保や衛生環境の改善を支援してくださいました。

清潔な水を喜ぶモザンビーク・ナンブラ州の人々



2019年度会計報告

活動計算書

収益	費用
受取会費 50,000	事業費
受取寄付金 139,412,726	広報・開発教育 36,273,658
受取助成金 2,181,280	アドボカシー 3,533,134
事業収益 3,249,280	水・衛生事業 / 募金 95,225,895
その他収益 83,196	管理費 9,289,167
合計 144,976,482	法人税等 70,000
	合計 144,391,854

貸借対照表

資産の部	負債の部
流動資産	流動負債
現金預金 24,015,937	未払金 10,649,692
未収収益 1,900,000	預り金 578,257
前払費用 187,000	未払法人税等 70,000
仮払金 49,616	負債合計 11,297,949
固定資産	正味財産の部
長期前払費用 296,084	前期繰越正味財産 16,254,060
敷金 1,683,000	当期正味財産増減額 584,628
保証金 5,000	正味財産合計 16,838,688
資産合計 28,136,637	
	負債及び正味財産合計 28,136,637

ウォーターエイドジャパンは、2019年度の会計等について以下の監査を受けています。

- 監事による業務および会計の監査
- 高野寛之公認会計士事務所による財務諸表の監査

ウォーターエイドジャパンについて

ウォーターエイドは2012年、日本法人設立の準備を開始しました。2013年2月、ウォーターエイドジャパンとして、東京都より特定非営利活動法人(NPO法人)の認証を受けて、法人としての歩みを始めました。ウォーターエイドが日本法人を立ち上げた

理由の1つに、日本が水・衛生分野において、世界で最大の援助供与国であることがあります。世界の水・衛生の改善に大きな役割を果たしてきた日本から、水・衛生の重要性について発信していく必要がある—そう考えて日本法人は設立されました。

概要

- 法人設立:2013年2月15日
- 認定NPO法人認定:2014年12月19日
*ウォーターエイドジャパンにご寄付をいただく個人・法人の皆さまは、税制優遇を受けていただくことが可能です。
- 常勤職員数:3名

活動

- 世界の水・衛生問題について関心喚起をするための情報発信
- 世界の水・衛生問題に関するアドボカシー・政策提言
- 途上国における井戸建設、トイレ建設、衛生教育などの水・衛生事業、およびそのための募金活動

ウォーターエイドジャパン 役員

理事長 小寺 清

元世界銀行・IMF 合同開発委員会事務局長、元国際協力機構(JICA)理事

理事 山村 寛

中央大学理工学部人間総合理工学科教授

理事 玉井 孝明

元東京海上ホールディングス株式会社取締役副社長

理事 和仁 亮裕

モリソン・フォスター法律事務所 弁護士

理事 夫馬 賢治

株式会社ニューラル代表取締役 CEO

監事 岩本 昌子

岩本法律事務所 弁護士

理事 安江 真理子

公益財団法人 中曽根康弘世界平和研究所主任研究員

(2020年7月1日現在)

ウォーターエイドの活動を支えているのは、皆さまからのご支援です。

毎月のご寄付(定額)

毎月、ご指定の金融機関の口座またはクレジットカードから、一定額を継続してご寄付いただくことで、途上国の人々に清潔な水と適切なトイレを届けるための活動を長期的に支えていただけます。継続してご支援をいただく皆さまには、ニュースレター「Oasis」(年3回発行)や年次報告書をお送りします。

初めてウォーターエイドジャパンへご寄付いただく方で、郵便局の払込取扱票以外でお振込いただく場合は、お名前、ご住所をお知らせください。ご連絡のない場合は、領収書をお送りすることができません。ご了承ください。

■郵便振替によるご寄付

記号番号 00100-0-359375
加入者名 ウォーターエイドジャパン

■金融機関からお振込によるご寄付

ゆうちょ銀行 〇〇八(ゼロゼロハチ)店
普通 4057566
特定非営利活動法人ウォーターエイドジャパン

■クレジットカード決済によるご寄付

毎月のご寄付、単発のご寄付がお選びいただけます。
<https://www.wateraid.org/jp/get-involved/donation>





特定非営利活動法人
ウォーターエイドジャパン(認定NPO法人)

〒130-0014 東京都墨田区亀沢2-12-11 PAX21 301号

Tel: 03-6240-2772 / Fax: 050-3488-2040

www.wateraid.org

[f/WaterAidJapan](https://www.facebook.com/WaterAidJapan) [t/WaterAidJapan](https://twitter.com/WaterAidJapan)

